Kwansei Gakuin University

ルーツへの旅

——*The Voyage of the* Beagle における言語的ジレンマと“Heart of Darkness”のモダニズムについて

伊　藤　正　範

Ⅰ．イントロダクション

Joseph　Conrad が当時ロシア領のポーランドで生を受けた２年後の1859年、Charles Darwin の *The Origin of Species* がイギリスで出版された。Conrad が翻訳を通してイギリス文学に親しみ始めたのが1870年頃、[1] イギリス船の船員となったのが1878年、そして英語による処女作を出版したのが1895年である。その作品の多くが船員時代の経験に基づいて書かれていることを含めると、いわば Conrad という作家の文学的感性は、Darwin 以後の——その新しい世界観が緩慢に浸透していく19世紀後半の——イギリスの知的土壌において養われてきたといっても過言ではない。

事実、これまでも、Conrad の作品における Darwin の影響を論じる試みはなされてきた。Allan Hunter は、Herbert Spencer や T. H. Huxley、あるいは Cesare Lombroso などの提示する進化論的な倫理観が、実は本来のダーウィニズムの曲解に基づくものであることを指摘しつつ、Conrad の作品が、そうした疑似ダーウィニズム的倫理観に反駁する要素を内包していると論じる。[2] 他方、Redmond O'Hanlon は、Conrad の提示する世界観、あるいはその風刺、登場人物などが、おしなべてダーウィニズム的な概念によって形成、支配されつつも、その根底においてラマルキズム的な——Darwin 以前の進化論の——原理に導かれていることを指摘する。[3] これらの議論が、Conrad にとどまらず、文学作品全般における科学的言説の影響を論じたという点で、大きな功績をなしていることは確かであろう。だが、他方で思い起こさなければならないのは、Gillian Beer が *Darwin's Plots* で指摘した、Darwin の「語り」の存在である。Beer は、科学的言説と文学作品の影響関係が一方向にとどまらないことを主張し、*The Origin of Species* における記述を「語り」とみなすことによって、先行する文学の影響を——文学テクストと科学テクストが双方向的な

1) Conrad の自伝、*A Personal Record* によると、Dickens の *Nicholas Nickleby* をポーランド語の翻訳で読んだのが1870年であるという。ただ、より正確には、父親の翻訳による *Two Gentlemen of Verona* を1865年頃に読んだのが、イギリス文学との最初の出会いであるようだ（71–72）。
2) 詳細については、Hunter, *Ethics* 1–2参照。また同様の議論については、Hunter, “Questions” 172–73参照。
3) 詳細については O'Hanlon 11参照。J. B. Lamarck（1744–1829）の進化論の要点が獲得形質の遺伝にあり、その点で Spencer を代表とする社会ダーウィニズムの進歩主義と強く結びついていったことを考慮すると、O'Hanlon の議論は Hunter のそれと対立するものといえる。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

関連性を有していることを――見事に暴き出した。[4)]

本論文の議論は、Beer の手法に依拠しつつも、同時にモダニズムという大きな文学史上の動向に目を向けることによって、従来にないテクストの形式研究を目指す。題材として主に取り上げるのは、Darwin の *The Voyage of the* Beagle (1839) と、Conrad の "Heart of Darkness" (1902) である。まず私が注目するのは、*The Voyage of the* Beagle が、その構成において、ロマンス的な降下物語、あるいは探求物語の構造を内包しているという点である。その上で、このテクストが西洋的な言語観への疑念を萌芽的、無意識的に内包すること、さらにこの疑念が、同様に降下、探求の物語の構造を持つ "Heart of Darkness" において、モダニズム的な言語感覚として開花することを論じていく。言いかえればこれは、科学と文学の壁を越えて、テクスト間の相互関連性を見いだしていく試みであり、同時に、20世紀に台頭するモダニズムという巨大な文学的運動の源泉を、19世紀初頭の自然科学のテクストに求めていく試みである。

Ⅱ. 探求物語としての *The Voyage of the* Beagle

The Voyage of the Beagle は、当初、*Beagle* 号の艦長であり、Darwin が航海を共にした Robert FitzRoy を編者とする 4 巻本の 1 冊として、1939年に刊行された。Darwin の執筆した巻は当時の出版事情としては売れ行きが良く、好意的な書評にも押される形で、その後、表題を *Journal of Researches into the Natural History and Geology of the Countries Visited During the Voyage of H.M.S.* Beagle *round the World* と改め、単独で版を重ねていく。[5)] タイトルが表す通り、この本は、Darwin が *Beagle* 号の航海で訪れた南アメリカやオセアニアにおける博物学と地質学を中心的に扱うもので、もともと、FitzRoy の航海記を科学的な観点から補足する役割を大きく担っていた。

他方、この作品が当時の社会において、もっぱら科学的な関心のみを引きつけていたかというと、決してそうではない。当時の *Quarterly Review* に掲載された書評では、Darwin の巻が「科学的関心を持つ者だけの興味を引く」のではないこと ("it is not to the scientific alone that Mr. Darwin's volume will prove highly interesting")、そして Darwin 自身が「ペンを携えた一級の風景画家」("a first-rate landscape-painter with the pen") であることが強調されている (233)。事実、*The Voyage of the* Beagle のテクストには、数多くの風景描写が含まれている。次の引用は、タヒチの山腹から見た眼下の光景についての描写である。

4) Beer は、Darwin の進化論が、彼が *Beagle* 号の航海に持ち込んだ Milton の詩集に影響を受けていることや、*The Origin of Species* の構成が、愛読していた Charles Dickens に倣ったものであることを指摘している (4–6)。

5) *The Voyage of the* Beagle の出版の経緯については Browne 413–18、Dawkins xxvii 参照。なお、本論文が依拠しているテクストは、1845年の第 2 版である。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

> From our position, almost suspended on the mountain-side, there were glimpses into the depths of the neighbouring valleys; and the lofty points of the central mountains, towering up within sixty degrees of the zenith, hid half the evening sky. Thus seated, it was a *sublime* spectacle to watch the shades of night gradually obscuring the last and highest pinnacles. (423; emphasis added)

イギリス的な風景とは異質の異国的眺望を提示しつつ、それが喚起する「崇高」を強調する描き方が、18世紀末から流行した、ロマン派的な風景描写の嗜好を念頭に置いたものであることは明らかであろう。また、Nigel Leask が指摘するように、*The Voyage of the* Beagle における風景描写が、Alexander von Humboldt の旅行記における「ピクチャレスク」な美学を踏襲しているのだとすれば (22–23)、Darwin が、当時の旅行文学における絵画的描写の流行を意識していたことは疑いを容れない。[6] すなわち、*The Voyage of the* Beagle は、当時の出版市場に狙いを定めた、「売れる」旅行文学として書かれた可能性を十二分に抱えているのである。[7]

ここで、John Tallmadge による、*The Voyage of the* Beagle の文学的特質の再評価に目を向けてみる。Tallmadge は、Darwin が、*Beagle* 号上で書いたオリジナルの手記を著作化するにあたって、その行程を時間的順序ではなく地理的順序に従って再構成していることに注目する。実際の *Beagle* 号の航海では、ある地点から別の地点へと直線的に移動していくことはむしろまれで、同一地点への訪問が、月日を挟んで複数回行われることが頻繁にあった。ところが、実際の著作の記述においては、そうした重複が一つにまとめられ、あたかも航海が、時間の経過とともに一方向に進行していくかのように改変されているというのだ (331)。[8] これを糸口として、Tallmadge は、*The Voyage of the* Beagle における修辞的戦略の介在を見抜き、その修辞の上に、旅行者としての Darwin 自身の反文化相対主義的な人格が入念に構築されていると論じる。そうした人格を通して、植民地を含めた非ヨーロッパ世界の文化が、イギリス的な基準と比べていかに劣っているか——「野蛮な」世界がイギリスの宣教師たちによっていかに進歩へと導かれたか——を提示するこ

6)「ピクチャレスク」の概念は、1760年後半以来の大陸旅行の一般化とともに、絵画のみならず旅行文学と深い結びつきを保った。Buzard 187、Baylis 396–97参照。*Quarterly Review* の書評がこうしたコンテクストを意識していたことは間違いないだろう。ちなみに、19世紀初頭に Uvedale Price は、「ピクチャレスク」が「絵画において良い効果をもたらしてきた、あるいはもたらすであろう物体や風景全般」("every object, and every kind of scenery, which has been, or might be represented with good effect in painting"; 37) に当てはまることを述べている。Price は、「ピクチャレスク」と「崇高」の相違についても詳細に議論しているが (83–101)、どちらの言葉も、当時の絵画的嗜好を表す概念として重なり合うものである。イギリスの旅行文学と植民地との結びつきについては、Mary Louse Pratt が詳細な議論を提供している。Pratt によると、Humboldt の旅行記に続いて台頭した19世紀初頭の旅行文学が、南アメリカの「再創造」につながり、結果としてヨーロッパの拡張主義に貢献したという (111–43)。

7) Darwin は、後年自伝において、*The Voyage of the* Beagle の成功が、他のどの作品の成功よりも彼の功名心をくすぐったことを明かしている (*Autobiography* 116)。ここに、*The Voyage of the* Beagle を出発点とした、「文学作家」としての Darwin の姿を見ることもできよう。

8) 同様の議論について Leask 14参照。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

とで、Darwin は、自国の文明に絶対的な信仰を持つ当時のイギリスの読者を確実に引きつけていったのだという（340–44）。

航海の方向性に関する Tallmadge の議論は、旅行文学としての *The Voyage of the* Beagle をロマンス的な降下の物語として読む、新たな視点を提供してくれる。Northrop Frye は、ロマンスにおける神話世界を四つのレベルに分け、それぞれに向かう上昇と下降の動きに応じて、物語の基本的構造を分類する（97–98）。*The Voyage of the* Beagle にこの分析を適用すると、さしずめ Darwin の描く航海は、第三階層の「現世」（“the world of ordinary experience”）から、第四階層の「悪魔的レベル、あるいは地獄」（“the demonic world or hell”）へ向かう、「降下」（“descent”）の旅とみなすことができるだろう。南アメリカのフエゴ島に入港する際に、*Beagle* 号の船上から見た風景を、Darwin はこう描写する。

> The harbour consists of a fine piece of water half surrounded by low rounded mountains of clay-slate, which are covered to the water's edge by one dense gloomy forest. A single glance at the landscape was sufficient to show me how widely different it was from any thing I had ever beheld. (216)

旅人の視点から綴られる異境の風景は、筆者が「かつて目にしたことがあるどんなものともまったく異なる」、すなわちヨーロッパの見慣れた光景とは著しく隔たったものとして提示される。眼前に広がる「陰鬱な密林」（“gloomy forest”）では、「死」が支配権を握っており（“in these still solitudes, Death, instead of Life, seemed the predominant spirit”; 222）、その住民たちは、キリスト教世界のオペラに登場する「悪魔」に酷似する（“The party altogether closely resembled the devils which come on the stage in plays like Der Freischutz”; 217）。ロマンス的降下の物語において、森は地下世界の入口であるという Frye の議論（111）もふまえると、Darwin が「現世」としてのヨーロッパ世界を離れてやって来たのは、まさしく「地獄」としての非ヨーロッパ世界なのである。

Frye によれば、そうした冥界への旅において、旅人をしばしば待ち受けているのが、「叡智や富」などの大いなる報奨であるという（98）。事実、Darwin がその航海で到達するさまざまな科学的真実は——特に *The Voyage of the* Beagle で展開される珊瑚礁形成についての議論は革新的かつ緻密で、当時も大きな評価をもって迎え入れられた——間違いなく「叡智」と呼べるものであろう。さらに Frye は、報奨を目的とする降下の旅の一形態として、中世騎士物語における「槍と聖杯」（“lance and grail”）の探求物語も挙げている（121）。こうしたことを考えあわせると、*The Voyage of the* Beagle を、ロマンス的モチーフをその細部において抱える、降下あるいは探求の物語として位置づけることが可能となるのである。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

そうした物語的原型の上に、西洋を位階の頂点に据える人種主義的な文明観は、より強固に築き上げられる。「地獄」に足を踏み入れた旅人が目にするのは、銃の脅威も理解せず、有効な統治制度も持たない住民たちであり、イギリスで教育を施した現地人たちが、帰還するやいなやもとの思考や生活習慣に立ち返ってしまう姿である（231，240–41）。Darwin がその旅で得る「叡智」とは、西洋文明が現地人の知能や風習に対して絶対的な優位性を保っていることの証明でもあるのだ。それでも、同書において奴隷への残酷な仕打ちを告発したり奴隷制度の廃止を訴えたりと、Darwin は当時のイギリスの知識人の中でも群を抜いて人種的偏見の排除に努めようとしていた人物であった。だが、そうした人物像は、テクストにおいて非ヨーロッパ世界の描写に込められた人種主義を決して相殺するわけではない。その解消しえない矛盾こそが、この *The Voyage of the* Beagle という「物語」の含意を浮き彫りにする。Darwin にとって、植民地、あるいは非ヨーロッパ世界とは「現世」の、すなわち西洋文明のアンチテーゼに他ならない。テクストは、*Beagle* 号での世界周航の旅をロマンス的な降下・探求の物語に回収することによって、二つの世界を明確に対置してみせるのである。

Ⅲ．動揺する西洋の言語

しかしながら、テクスト内に織り込まれた西洋文明への信仰は、決して一枚岩的なものではない。Tallmadge の議論は *The Voyage of the* Beagle の修辞的戦略を見抜いた点で秀逸のものであるが、その修辞性の上に構築された西洋中心主義は、まさに修辞そのものによって覆される可能性を抱えている。

このテクストにおいて西洋文明の優位性を確立しようとしている修辞的戦略の一つに、非ヨーロッパ世界における言語的な未熟性の強調が挙げられる。Darwin は、フエゴ人の言語が「明瞭とはとても言えない」（“The language of these people . . . scarcely deserves to be called articulate”）ことを指摘した後で、「キャプテン・クックがそれを人の咳払いする音に喩えたこと」（“Captain Cook has compared it to a man clearing his throat”）、だが「ヨーロッパ人は誰もそんなしわがれた、ごろごろカチカチする音をいくつも立てて咳払いなどしない」（“certainly no European ever cleared his throat with so many hoarse, guttural, and clicking sounds”）ことを、明らかな皮肉を込めて述べる（217–18）。この皮肉が、対照的にヨーロッパ言語の優位性を打ち立てる上で、有効な修辞的方策として機能しているのは間違いないだろう。

だが、実は、言語に対する Darwin 自身の態度には、こうした「文明」と「野蛮」の明晰な区分を往々にして覆す要素が秘められている。テクスト中、Darwin は自らのある「強い願望」を、言語にまつわる直喩を用いてこう表す。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

> A strong desire is always felt to ascertain whether any human being has previously visited an unfrequented spot. A bit of wood with a nail in it, is picked up and studied as if it were covered with hieroglyphics. (294)

釘が刺さった木片を、まるで「象形文字」が覆っているかのように「調べる」この姿勢こそ、Darwin が全編を通して依拠している科学的観察眼の要といってもよいものである。つまり、彼にとって、世界は言語のごとく「読む」ものなのだ。地層を「読み」、鳥の羽やくちばしを「読み」、珊瑚礁を「読み」、それら表面的な現象の奥底に隠されている真実を探り当てる――いわば、Darwin にとっては、自然や世界そのものが「解読」すべき言語的構築物なのである。

だとすればこそ、フエゴ人の言語は、その不明瞭さゆえにテクストの中核すら脅かしかねない可能性を内包している。事実、それは Darwin が語るフエゴ島のエピソードの一つにおいて現出してくる。

> Young and old, men and children, never ceased repeating the word "yammerschooner," which means "give me." After pointing to almost every object, one after the other, even to the buttons on our coats, and saying their favourite word in as many intonations as possible, they would then use it in a neuter sense, and vacantly repeat "yammerschooner." (230)

"[Y]ammerschooner" というフエゴ人たちの物乞い言葉に言及しながら、Darwin は、まず当たり前のようにその「意味」から語り始める。そこにさりげなく西洋的な言語観が、あるいは先の象形文字の比喩で彼が示そうとした、解読への「強い願望」が潜んでいるのは疑いないだろう。だが、この言語は、西洋の言語とは相容れない不可解な特質に満ちている。それは、終わりのない繰り返しと際限のないイントネーションの変化、そしてそれを経た言語の空洞化――フエゴ人たちは、その言葉を「どっちつかずの意味で」("in a neuter sense") 用いはじめ、「虚ろに」("vacantly") 繰り返す――である。[9)]

もちろんこのエピソードが、西洋言語の完成度を相対的に示すという修辞的戦略を担っていることは否定できない。だが、フエゴ島に滞在している間中この言葉に悩まされたという Darwin の語り口は、このテクスト全体を貫いている論理的な姿勢とは明らかに異質のものである。それは次の一節において明白に示されている。

9) Stephen G. Alter は、*The Origin of Species* 以前の Darwin によるノートや草稿の分析を通して、彼が人間の起源についての考察に早々と達していたこと、その際に人間の話し言葉の起源に注目し、「言語」と「種」の類似性を考察していたことを明らかにしている (15–16)。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

> While in the boats I got to hate the very sound of their voices, so much trouble did they give us. The first and last word was "yammerschooner." When, entering some quiet little cove, we have looked round and thought to pass a quiet night, the odious word "yammerschooner" has shrilly sounded from some gloomy nook, and then the little signal-smoke has curled up to spread the news far and wide. On leaving some place we have said to each other, "Thank heaven, we have at last fairly left these wretches!" when one more faint halloo from an all-powerful voice, heard at a prodigious distance, would reach our ears, and clearly could we distinguish—"yammerschooner." (238)

"[H]ate" や "odious" といった語を躊躇せずに用いる Darwin は、もはや嫌悪感を微塵も隠そうとしない。悪夢のように付きまとう現地人の言葉は、冷徹に世界を「読む」ことに長けた科学者の心を、かくもかき乱すのである。非ヨーロッパ世界で Darwin が出会った空洞の言語は、地層や化石のように彼の「解読」を受け入れることなく、永遠の繰り返しをもって彼に迫ってくる。これを振り払うことのできない焦燥感を、テクストは——Darwin の意図とは無関係に——如実に暴き出しているのである。

このような不安感を共有するものに、もう一つ、文明と非文明の連続性に対する意識が挙げられる。霙が降りしきる中、裸の赤ん坊を覆いもせず抱き続けるフエゴ人の母親の描写において、Darwin の筆は、やはり嫌悪感をほとばしらせる。

> These poor wretches were stunted in their growth, their hideous faces bedaubed with white paint, their skins filthy and greasy, their hair entangled, their voices discordant, and their gestures violent. Viewing such men, one can hardly make oneself believe that they are fellow-creatures, and inhabitants of the same world. (225)

"[H]ideous"、"filthy" といった言葉によって表されるフエゴ人たちへの否定的感情は、そのまま、彼らと自分たちが「同じ世界」の住人であるという事実の拒絶へとつながっていく。それが西洋的な人種主義に基づいたものであることは疑いを容れないが、テクストは同時に、Darwin が、フエゴ人とヨーロッパ人との連続性を——彼らが「同胞」であり、「同じ世界の住人」であることを——確実に意識していることを露呈する。

そうした意識は、テクストの修辞的戦略の一端であるはずの言語をもってしても打ち消すことができない。そのことは、後の著書、*The Descent of Man* (1871) において、より明白な認識となって現れる。「言語」("Language") と題されたセクションにおいて、Darwin は、言語が神から与えられたものではなく、自然淘汰と同じ漸次的プロセスで形成されてきたものであること、生物界における人間の優位性が、その言語能力に大きく依

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

拠しているにもかかわらず、それが人間と他の生物とを隔てる先天的な相違ではないことを明らかにする（106–14）。人間とその他の生物が超越不可能な壁をもって隔てられているという信仰が、西洋と非西洋の先天的な差異を確信する文化的ディスコースの同一線上にあることは明らかである。*The Voyage of the* Beagle の出版から32年、*The Descent of Man* においてようやく創造主義的な人類観への反駁を公にした Darwin は、フエゴ島のエピソード——イギリスに連れ帰ったフエゴ人たちの心的能力において、イギリス人と何ら差異を見いだせなかったこと——を引き合いに出しながら、人間が下等動物から不可侵的に隔てられているという旧来的な考え方を問いただしていく（86, 100–01）。[10] このような、言語が人間の、そしてより近視眼的には西洋文明の特権性を証明するものにはなり得ないという感覚は、“yammerschooner” という叫び声に追いかけられる Darwin の焦燥感の背後に、確実に存在しているのだ。

Darwin にとって、言語とは、西洋の優位性を立証するテクストの修辞的戦略の一端であった。しかし、その言語が西洋文明に対する脅威へと転じる様を、（Darwin の意図とは関係なく）テクストは克明に記録する。このジレンマにこそ、ルーツへの旅において、ルーツとの明確な差異化が拒まれる瞬間が刻印されているのだ。それは、たとえて言うならば、Darwin がチリで初めて経験した地震のように、「堅固さの象徴であった大地が、流体を覆う薄い殻のように足下で動揺する」（“the earth, the very emblem of solidity, has moved beneath our feet like a thin crust over a fluid”; 313）瞬間であり、「一瞬のうちにこれまで感じたこともない不安の観念が心中に生じてくる」（“one second of time has created in the mind a strange idea of insecurity”; 313）瞬間なのである。

Ⅳ.「闇の奥」への探求とモダニズムの言語

ここからの議論は、*The Voyage of the* Beagle において徴候的に現れる、文明の言語の不完全性、ルーツとの差異化の困難さが、Conrad の “Heart of Darkness” において、同様の探求物語、あるいは降下物語の枠組の中、より明晰に主題化されていることを論じていく。

この中編小説に探求物語の構図を見いだす試みは、決して新しいものではない。Jerome Thale は、“Heart of Darkness” が、典型的な冒険譚の要素——謎、異国的舞台、逃亡、サスペンス、不意打ちなど——をことごとく内包していることを指摘しながら、このテクストを「聖杯探求」（“grail quest”）の物語として位置づける（318）。Thale による

10) Darwin の自然淘汰説の真の意義は、人間のルーツを、旧来の聖書的な世界像——超越的な存在が、人間を生物界の位階の頂点に君臨すべく創造したというイメージ——の外部に見いだした点にある。だが、Darwin 自身は、このテーマについてぎりぎりまで言及を避けていた。初めて人類の起源について扱った *The Descent of Man* のイントロダクションで、彼は、この主題について出版する意図をまったく持ち合わせていなかったことを明かす（17）。このことは、当時の社会において、創造説的な人間の位置づけを疑問に付すことがどれだけ困難であったかを示している。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

と、Marlowは聖杯を求めて旅立つ騎士と重なり、その行程は細部に至るまで聖杯探求物語の原型に一致するという。Marlowはさまざまな試練や障害を克服し、困難な航海の末ようやく「壮大な城」(“fabulous castle”)に囚われる「魔法をかけられた王女」(“enchanted princess”)、すなわちKurtzにたどり着く。あるいはKurtz自身を聖杯として見ることも可能であり、その場合、Kurtzは「光明」(“illumination”)を、すなわち「自分自身と人間すべてについての発見」(“discovery about himself and all men”)をもたらしてくれる、探求の目的物であるという(318–19)。[11)]

さらに、Marlowの旅が、冥界に向けての降下の旅であることは、作中において明白に示唆されている。Marlowが向かうアフリカの奥地は、この作品の表題通り「闇の奥」であると同時に、「地球の中心」でもある(“I were about to set off for the centre of the earth”; 150)。その行程で、彼は「地獄」そのものに足を踏み入れ(“I had stepped into the gloomy circle of some Inferno”; 156)、川を遡って「闇の中心へと深く深く貫いていく」(“We penetrated deeper and deeper into the heart of darkness”; 185)のだ。

“Heart of Darkness”におけるこうした冥府下りのテーマに注目しているのは、Lillian Federである。FederはMarlowの中央アフリカへの旅と、Virgilの*Aeneid*第6巻におけるAeneasの冥界への旅が、密接な類似性を保持していると主張する(281)。一例を引けば、その「降下の旅」の入口となる場所が、Conradにおいては「ジャングル」であるのに対して、Virgilにおいては「森」であり、さらに、両者ともその描写において“gloom”あるいは“gloomy”という表現——言うまでもなく、Fryeの議論におけるロマンス的物語の重要な要素である——を多用しているという(281–85)。しかしより顕著なのが、Federの言う、旅の目的の合致である。“Heart of Darkness”の冒頭で、Marlowは、ローマ人によるイギリス征服に言及しながらこう語る。

> The conquest of the earth, which mostly means the taking it away from those who have a different complexion or slightly flatter noses than ourselves, is not a pretty thing when you look into it too much. What redeems it is the idea only. (140–41)

ローマによるイギリス征服と、現在のイギリスによるアフリカの植民地支配とを明らかに重ね合わせるMarlowの語りは、植民地主義を唯一正当化するという「観念」(“idea”)を主題化しているようにも見える。Federによると、この「観念」こそが、*Aeneid*第6巻の主題、あるいはその冥界への旅の目的として設定されているもの——すなわち、未来におけるローマの略奪と残虐行為の正当化——と重なり合うのだという。こうした類似性に基

11) Deborah Guthは、同様の視点から、MarlowのKurtzとの邂逅が、「探求物語」(“Quest”)であると同時に、「創造神話」(“creation myth”)——ただし無からの創造ではなく、元来の世界秩序がいかに破壊されたかを描き出すもの——であると論じている(155)。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

づいて、Federは、Marlowの旅が、Aeneasの旅と同様、暗黒の世界で真実、あるいは「光明」（“light”）を見いだす、「啓示的」（“enlightening”）な旅であることを明らかにしてみせる（281–82）。[12]

しかしながら、Federの言う「光明」の探索、あるいは植民地主義の正当化という目的は、テクスト中、進化論的な関心と結びつくことで揺らぎを示し始める。実はMarlowの旅は、地下世界への降下の旅であると同時に、「世界の最古の始まり」（“the earliest beginnings of the world”; 182）、あるいは「有史以前の大地」（“prehistoric earth”; 185）に向けた遡及の旅としても提示される。（ちなみに、アフリカの先住民たちは「いまだ時の始まりに属して」いる（“They still belonged to the beginnings of time”; 193）。）いわば、アフリカの奥地へ向けての旅は、時を遡ってその始原へと至り、人類の起源に直面する行程でもあるのだ。その遡及の旅において、Marlowが——当初想定されていた「観念」とは異なる形で——見いだすのは、文明と非文明の戦慄すべき類縁性である。

> No, they were not inhuman. Well, you know, that was the worst of it—this suspicion of their not being inhuman. It would come slowly to one. They howled and leaped, and spun, and made horrid faces; but what thrilled you was just the thought of their humanity—like yours—the thought of your remote kinship with this wild and passionate uproar. Ugly. (186)

この「醜怪だ」という声にこそ、*The Voyage of the* Beagleにおいて示されるDarwinの嫌悪感——すなわちフエゴ人たちが紛れもなく西洋人の「同胞」であり、「同じ世界の住人」であるという事実に対する嫌悪感——が谺する。Darwinの旅と同様、Marlowの旅が内包する人類のルーツへの進化論的な関心は、西洋文明への絶対的信仰を崩壊に導くきっかけに他ならない。これにより、アフリカという場所は、（まさにChinua Achebeが批判したように）ヨーロッパ文明の精神的優越性が徹底的に試される舞台となるのである。[13]

このように見ていくと、“Heart of Darkness”と*The Voyage of the* Beagleの両テクストが、探求物語あるいは冥府下りの構図、進化論的ルーツへの関心、そして西洋文明の挫折という主題において、極めて近い特徴を抱えていることが明らかになってくるだろう。そうしたテクスト間の類似性を立証していく上で、もう一つの、そして最も重要な論点は、言語、あるいは言語的なものへの欲求である。事実、“Heart of Darkness”における探求の目的は言語そのものであるといっても過言ではない。密林の奥地に一人取り残されたKurtzという存在は、Marlowの旅の目的であると同時に、単なる「言葉」としてしか立ち

12）ちなみに、「暗黒」の地で「光明」を求めるという主題は、言うまでもなく、“Heart of Darkness”の全編を通して繰り返される「光」と「闇」の対照的イメージと密接に連動している。
13）Achebeの非難は、アフリカが「ちっぽけなヨーロッパの精神の崩壊」（“the break-up of one petty European mind”; 399）の舞台に成り下がっていることに向けられる。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

現れてこない（“He was just a word for me”; 172）。そしてまだ見ぬ Kurtz に思いを募らせる Marlow は、次第に「Kurtz と話をすること」だけが自分の目的であることに、また彼のことを「ただ話すだけの」存在としてしかみなしていないことに気づくのだ（“I... became aware that that was exactly what I had been looking forward to—a talk with Kurtz. I made the strange discovery that I had never imagined him as doing, you know, but as discoursing”; 203）。果たして、ようやく出会った Kurtz は、まさに「声」そのものとして Marlow の前に現れる（“The man presented himself as a voice”; 203）。彼の半ば盲目的な歓喜と感嘆（“A voice! A voice! It was grave, profound, vibrating, while the man did not seem capable of a whisper”; 225）は、苦難を越えて目的に到達した人間のそれに他ならない。[14] *The Voyage of the* Beagle と同様、“Heart of Darkness” においても言葉は探求物語、あるいは降下物語の中核に位置しているのである。

そうした言葉は、非ヨーロッパ世界という環境において、やはり大いなる試練に直面する。Marlow がアフリカで最初に逗留する出張所で、白人の主任会計士は、奥地出張所（Inner Station）にいる Kurtz によろしく伝えてくれるよう Marlow に請いつつ、自ら手紙を書かないことを「あの中央出張所では、誰が手紙を握るかわからないから」だと弁明する（“you never know who may get hold of your letter—at that Central Station”; 160）。[15] この手紙の不到達性は、後に、中央出張所にて沈没した汽船の修理を急ぐ Marlow をも悩ませる。というのも、毎週のように現地人の伝令が送り出されているにもかかわらず、修理のために必要なリベットがいっこうに到着しないのである。業を煮やした Marlow は、支配人の腹心である一等代理人に「手紙が毎週海岸に行っているではないか」（“Now letters went to the coast every week”; 174）と詰め寄るのであるが、一等代理人は「（支配人の言葉を）口述筆記をしているのだが」（“I write from dictation”; 174）と口を濁すだけで、話題をそらしてしまうのである。

手紙が適切に伝達されないというこの現象は、実際、物語に隠されたある陰謀によって引き起こされていると見てよいだろう。Hunter は、テクストの背後に殺人のプロットが埋め込まれていることを指摘する。中央出張所の支配人は、将来を嘱望された Kurtz に会社での地位を奪われることを恐れ、救援船の出発を遅延させ、病を患い一人奥地に残される Kurtz の死を狙ったのだという（“Questions” 170–72）。[16] だとすれば、この手紙の不到達性もまた、殺人の陰謀の一環として、支配人が手引きしたことと見るのが自然であろ

14）付け加えるならば、Kurtz の「言葉」は、探求物語あるいは降下物語の典型的目的物である「光明」と直接重なり合っている。“Heart of Darkness” の冒頭において、西洋文明は、暗黒の植民地を照らし出す「たいまつ」（“torch”; 137）に喩えられるのだが、この Kurtz のもつ「言葉」の力もまた、「脈動する光の奔流」（“the pulsating stream of light”; 203–04）として表出される。

15）Marlow の行程は、会社の出張所を拠点にして奥地へと進行していくものである。最初がこの主任会計士のいる出張所、次が支配人のいる中央出張所（the Central Station）、最後が Marlow のいる奥地出張所（the Inner Station）となる。

16）同様の指摘については、Watts, *Deceptive Text* 119–20参照。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

う。その一方、前述のような、このテクストにおけるKurtzの象徴的意味を考慮に入れると、支配人による殺人のプロットは別の様相を帯びて現れる。支配人が殺そうとしているのはKurtzという西洋の有能な青年であるばかりでなく、西洋の「言葉」——それこそが旅の目的物としてのKurtzが体現しているものであり、言語的構築物としての手紙が象徴しているもの——でもあるのだ。

そのことは、支配人にまつわる他のエピソードにおいても証明される。初めて支配人に会ったMarlowは、その何の変哲もない平凡な人物が見せる「笑み」に、言いようのない不安をかき立てられる。

> It was unconscious, this smile was, though just after he had said something it got intensified for an instant. It came at the end of his speeches like a seal applied on the words to make the meaning of the commonest phrase appear absolutely inscrutable. (163)

「最も平凡な言葉の意味をまったく不可解なものにして」しまうこの「封印」のような「笑み」が、その持ち主の殺人の陰謀と重なり合ったとき、テクストの内包する言語への欲求は、重層的に阻害されることになる。いわば、支配人という登場人物を介して、テクストの言語は「殺害」の〈陰謀＝プロット〉に深く巻き込まれていくのである。

果たして、「闇の奥」への旅の途上、Marlowが目撃するのは、西洋の言語がその堅固さを次第に、しかし確実に喪失していく様子である。道中、一軒の無人の小屋に立ち寄ったMarlowは、その中で見つけた操船術に関する本の余白に、びっしりと「暗号」(“cipher”)が書きこまれているのを見つけて驚く。後にこの文字は、Kurtzに追従するロシア人青年の書いたロシア語であることが判明するのだが、そのことはさほど重要ではない。このエピソードは、アフリカのジャングルで操船術を研究するという行為の無益さばかりでなく、言語の意味を隠匿するという暗号化の行為が、未開の地においてまったく用をなさないことを、換言するならば、「人間の言語の音とは似ても似つかぬ言葉の連なり」(“strings of . . . words that resembled no sounds of human language”; 236) しか持たない土地において、西洋の言語がそもそも意味を持ち得ないことを、巧みに前景化しているのである。[17)]

言語に対する懐疑がこのように深まっていく物語の——あるいは旅の——ベクトルを考えると、目的地であるジャングルの深奥で出会ったKurtzが「声だけ」の存在であるというのは、もはやアイロニー以外の何ものでもない。実際、Kurtzという人間は、希求された言語の、むしろ不確かさを象徴する。彼の「壮大な雄弁」の下には「何かが欠落して」いる (“there was something wanting in him—some small matter which . . . could not be

17) ちなみに、Achebeは、Conradが現地人に言葉を与えない点について激しい批判を展開している (397)。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

found under his magnificent eloquence"; 221）し、彼という存在そのものが「その中核において空洞」なのだ（"he was hollow at the core"; 221）。Kurtzが残した最後の言葉——"The horror! The horror!"（239）——については、ここで改めて言うまでもない。Tzvetan Todorovの言葉を借りれば、それは「空洞を表す言葉」（"words that express the void"; 109）であり、またPeter Brooksの言葉を借りれば、「言語から転落せんとする言語」（"language . . . on the verge of a fall from language"; 250）なのである。

付け加えるならば、Kurtzが「国際蛮行抑制協会」（"the International Society for the Suppression of Savage Customs"）のために書いたレポートも、言語の空洞性を暴き出す事例に他ならない。狂気に陥る以前のKurtzによって書かれた17ページのレポートは、白人が「蛮人」に対して神のようにあるべきであると説く文面の中に、「無限なる雄弁の力」（"the unbounded power of eloquence"; 208）を宿している。その圧倒的な言語の力に陶酔するMarlowの目に飛び込んでくるのは、しかし、最後のページに殴り書きされた「けだものどもを皆殺しにしろ！」（"Exterminate all the brutes!"; 208）という一文である。西洋文明の優越性を疑念の余地なく築き上げるはずの言語の雄弁性は、同一のテクスト内に埋め込まれたもう一つの——同一の書き手による——異なるディスコースによって、根幹から打ち砕かれる。後に残されるのは、意味の抜け去った、17ページにわたる「言葉」の形骸に過ぎないのだ。

こうして、Marlowの探求の旅は、空洞の言語との出会いによってその幕を閉じる。その旅が人類のルーツに向けてのものだとしたら、そこで見いだされるのは、文明という人類の至高の到達物であるはずのものが、実のところ、その起源と明確に差異化できるものではないという事実に他ならない。（先住民たちの話す「人間の言語の音とは似ても似つかぬ言葉の連なり」と、Kurtzの虚ろな声との差異を、実際どこに見いだすことができようか。）この点において、"Heart of Darkness"におけるMarlowの旅は、*The Voyage of the* BeagleにおけるDarwinの旅のまさに変奏であるといっても過言ではない。同様の探求物語（あるいは降下物語）の形態において、Conradのテクストは、Darwinのそれが無自覚的に仄めかしていた西洋言語の不全性、文明とルーツとの連続性を、より明確に顕在化させるのだ。およそ60年の時を挟んで、微かな徴候にすぎなかった「動揺」は、致命的な「打撃」として——言語を、そして文明を殺害する「打撃」として——蘇らせられるのである。

こうした見方は、Conrad研究における新しい可能性を示唆する。これまで様々な批評家が、"Heart of Darkness"をモダニズムの先駆的テクストとして論じてきた。例えば、Brooksは、この作品に「私たちがモダニストとして特徴づける、19世紀後期と20世紀初頭の語りに固有の性質」（"characteristic peculiar to late nineteenth- and early twentieth-century narrative—that which we characterize as modernist"; 261）を見いだし、またCedric Wattsは、EliotやKafka、Woolf、Becketなどのモダニストが共有する感覚——

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

「不条理さや無意味さ、人間の孤立、そしてコミュニケーションの問題性」(“the sense of absurdity or meaninglessness, of human isolation, and of the problematic nature of communication”; “‘Heart of Darkness’” 52) ——が、おしなべてこの作品に示されていることを主張している。こうした先駆的モダニストとしてのConrad像が、作家個人としての重要性のみならず、イギリス文学そのものの変遷を探る上でも、大きな意義を抱えていることは確かである。だがその一方、そうした議論が、四半世紀のちに到来するモダニズム全盛期との関連でのみ行われてきたのもまた確かである。本論考における過去へのまなざしは、モダニズムのルーツが、Darwinという科学者が無意識のうちにテクストに埋没させた、言語への、そして西洋文明への不安にあることを暴き出す。これは、モダニズムという巨大な文学運動が、実は、ダーウィニズムという思想の一大転換と軌を一にしている可能性を示唆するのである。このように*The Voyage of the* Beagleと“Heart of Darkness”のインターテクスチュアルな関連性は、文学研究における新しい地平を切り拓くのである。

参照文献

Achebe, Chinua. “An Image of Africa”. 1977. Carabine 393–404.

Alter, Stephen G. *Darwinism and the Linguistic Image.* Baltimore and London: Johns Hopkins UP, 1999.

Baylis, Gail. “England, Seventeenth and Eighteenth Centuries”. *Literature of Travel and Exploration: An Encyclopedia.* Vol. 1. Ed. Jennifer Speake. New York: Fitzroy Dearborn, 2003.

Beer, Gillian. *Darwin's Plots: Evolutionary Narrative in Darwin, George Eliot and Nineteenth-Century Fiction.* 2nd ed. 1983. Cambridge: Cambridge UP, 2000.

Brooks, Peter. *Reading for the Plot: Design and Intention in Narrative.* Cambridge, Massachusetts: Harvard UP, 1984.

Browne, Janet. *Charles Darwin: Voyaging.* Princeton: Princeton UP, 1995.

Buzard, James. *The Beaten Track: European Tourism, Literature, and the Ways to ‘Culture’ 1800–1918.* Oxford: Clarendon P, 1993.

Carabine, Keith, ed. *Joseph Conrad: Critical Assessments.* Vol. 2. Mountfield: Helm Information, 1992.

Conrad, Joseph. “Heart of Darkness”. *Heart of Darkness and Other Tales.* Oxford: Oxford UP, 1990. 133–252.

——. *A Personal Record. The Mirror of the Sea and A Personal Record.* Oxford: Oxford UP, 1988.

Darwin, Charles. *The Autobiography of Charles Darwin 1809–1882.* Ed. Nora Barlow. 1958. New York and London: Norton, 1993.

——. *The Descent of Man.* 1879. London: Penguin, 2004.

——. *Journal of Researches into the Natural History and Geology of the Countries Visited During the Voyage of H. M. S.* Beagle *round the World, 1832–36.* Darwin, *The Origin of Species and The Voyage of the* Beagle 1–517.

——. *The Origin of Species and The Voyage of the* Beagle. New York: Alfred A. Knopf, 2003.

Dawkins, Richard. Introduction. Darwin, *The Origin of Species and The Voyage of the* Beagle ix–xxx.

Feder, Lilian. “Marlow's Descent into Hell”. *Nineteenth-Century Fiction* 9 (1955): 280–92.

Frye, Northrop. *The Secular Scripture: A Study of the Structure of Romance.* Cambridge, Massachusetts:

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

Harvard UP, 1976.

Guth, Deborah. "Conrad's *Heart of Darkness* as Creation Myth". *Journal of European Studies* 17 (1987): 155–66.

Hunter, Allan. "*Heart of Darkness* Questions Popular Beliefs". *Readings on* Heart of Darkness. Ed. Clarice Swisher. San Diego: Greenhaven P, 1999. 169–76.

——. *Joseph Conrad and the Ethics of Darwinism: The Challenges of Science.* London: Croom Helm, 1983.

Leask, Nigel. "Darwin's 'Second Sun': Alexander von Humboldt and the Genesis of *The Voyage of the* Beagle". *Literature, Science, Psychoanalysis, 1830–1970.* Eds. Helen Small and Trudi Tate. Oxford: Oxford UP, 2003. 13–36.

O'Hanlon, Redmond. *Joseph Conrad and Charles Darwin: The Influence of Scientific Thought on Conrad's Fiction.* Edinburgh: Salamander P, 1984.

Pratt, Mary Louise. *Imperial Eyes: Travel Writing and Transculturation.* London and New York: Routledge, 1992.

Price, Uvedale. *Essays on the Picturesque, as Compared with the Sublime and the Beautiful.* Vol. 1. 1810. Bristol: Thoemmes Press, 2001.

Rev. of *Narrative of the Surveying Voyages of H. M. S.* Adventure *and* Beagle *between the Years 1826 and 1836* and *Journal of Researches into the Geology and Natural History of the Various Countries Visited by H. M. S.* Beagle. *Quarterly Review* 1839: 194–234.

Tallmadge, John. "From Chronicle to Quest: The Shaping of Darwin's 'Voyage of the *Beagle*'". *Victorian Studies* 23 (1980): 324–45.

Thale, Jerone. "Marlow's Quest". 1955. Carabine 318–25.

Todorov, Tzvetan. *Genres in Discourse.* Trans. Catherine Porter. Cambridge: Cambridge UP, 1990.

Watts, Cedric. *The Deceptive Text: An Introduction to Covert Plots.* Brighton: Harvester P, 1984.

——. "'Heart of Darkness'". *The Cambridge Companion to Joseph Conrad.* Ed. J. H. Stape. Cambridge: Cambridge UP, 1996.

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

In Quest of Roots:

A Linguistic Dilemma in *The Voyage of the* Beagle and Modernism in "Heart of Darkness"

Masanori ITO

In *The Voyage of the* Beagle (1839), the prosaic journey of research is reconstructed as a fascinating quest narrative that, by presenting non-European countries as a barbaric, primordial world, rhetorically confirms the superiority of Western civilization. However, such a racist belief is by no means unswerving. Its rhetorical strategy includes an emphasis on the linguistic immaturity of the non-European world. Counterposed with Darwin's scientific attitude by which the natural world is "read" like a language, this strategy certainly consolidates the preeminence of civilization. Yet, at the same time, the text unconsciously discloses a dilemma within its linguistic concern: the author's uneasiness, stirred by the vacant, inscrutable language of the Fuegians, in turn implies a deficiency in the Western language itself.

"Heart of Darkness" (1902), which shares this structure of quest narrative, also poses a question about language as its central theme: Kurtz's eloquence, an object of Marlow's quest into central Africa, only reveals an immense hollow beneath its surface. There, the expected proof of an inviolable distinction between civilization and its roots receives a fatal blow. This is the thematic reappearance of a vague uneasiness embedded in a scientific text from sixty-three years before—this time as a more articulate skepticism.

Such a critical perspective discloses how the roots of an early modernist text are located in one of Darwin's writings. This points to the possibility that modernism as a twentieth-century literary movement also ramifies an epistemological cataclysm brought about by the emergence of Darwinism in the middle of the nineteenth century.

NII-Electronic Library Service